

異世界で
ゆるゆる生活^を
満喫す
4

Hazuki Yuna

◆ 著 葉月ゆな

◆ 絵 ガラスノ

ソフィア

ハルトの祖母。
怒るとおっかない。

ジェラ

ハルトの兄。
家族の
ムードメーカー。

ダイアナ

サウスコート家の
次期当主。

ハルト

ウエストランド家の三男。
理想のゆるゆる生活を
満喫するため、
前世の知識を生かして
魔導具を開発していく。

ルーカス

ハルトの従魔。
最強ドラゴンが
転生した姿。

アトレ

ハルトの従魔。
超希少な
フェンリルの子供。

私——リーンハルト・ウエストランドには、日本という国で生活していた時の記憶が部分的にある。

困ったことが起こると、前世の記憶を頼りに解決策を家族に提案していたら、どれも大規模な事業になっていた。

かわら版事業にティーバッグ事業、最近だとクロンデル公爵領こうしやうのダンジョンで香辛料栽培が成功し、カレー粉事業が始まった。

両親をはじめ、多くの人たちに支えられて実現できていることに感謝しかないが、幼い私がなぜこんなに忙しく動かないといけないのか……不満ではある。

でもみんなが喜んでくれる姿を見ると、やって良かったと思う自分もいるから複雑だ。

そうそう、かねてから問題になっていた、樹海に住み着いたホワイトドラゴンの問題も片づいた。ホワイトドラゴンは樹海にあった魔力だまりの浄化に失敗して、闇落ち寸前だったのだ。

世界樹はじめ、多くの人たちの協力で、ホワイトドラゴンを助けることに成功した。

助けたホワイトドラゴンは、力が残っていないから協力してくれと私に頼み、そのまま転生して卵になった。

そして生まれ変わったホワイトドラゴンは、私の魔力が必要だと言って我が家に居座っている。

ついでに私の3つ目の加護も判明した。

なんと「大地神…温泉」というものだったのだ。

この加護を使って、我が家に温泉を作り、新たな町——温泉町を作ることも決まる。

新たな町の建設を指揮する人が必要なため家族で頭を悩ませていたら、クリスマス様が、隠居して国外を旅行している祖父母を呼び戻そうと言いつ出した。

伝説の生物ドラゴンの存在を餌にすると、祖父母は速攻で戻ってきたが、手伝うための条件を出される。

私たち兄弟、両親と同じように相棒が欲しいとのことだ。

保証はないと言いつつ、お祖父様には雷属性の魔獣をモチーフにした飾りナイフ、お祖母様にも同様に火の精霊がモチーフのナイフを渡すと——2人にもモチーフ通りの相棒ができた。

家族からは加護の力かと疑われるが、私もなぜこうなるのかわからない。

何はともあれ、家族全員に相棒ができて良かった。

条件を達成したので、新町の采配はお祖父様が行うことに決定。

温泉町を成功させるために、私もアイデアをたくさん出していくつもりだ。

第1話 難航しています

私——リンハルトは、9歳になりました。

9歳になったので、一人称を「僕」から「私」に変えた。

同時に両親も父上、母上と呼び方を変える。

本当は10歳の誕生日で変えようと思っていたが……すでにラファエルの一人称が「僕」じゃなくて「私」だったから、自分が凄く幼いように思ってしまったんだ。

ラファエルに合わせてすぐに呼び方を変えるのも、「影響受けた」とからかわれそうだと思い、9歳の誕生日で家族に宣言した。

母上は寂しそうな、残念そうな顔をしたが……。

「私」と言い始めて、大人びた気がするからいいのだ。

この1年間はとにかく慌ただしかった。

ホワイトドラゴンの件があったからしようがないとは思っているけれど、私のスローライフは崩れてきている。

ただ忙しい中でも、新たな出会いがあったし、カレー料理、温泉なども堪能できた。

でもまだ私は9歳なんだ、義務はこなしつつ、楽しく過ごしていきたい。

先日も、新たな居住地で生活を始めた牛のような魔獣——ヴァーシユの群れの様子を見に行った。ヴァーシユは私が用意した牧草地を気に入ってくれたようで、患^{わづ}っていた病気も良くなっていた。近いうちに完治しそうだ。

ヴァーシユの世話係を引き受けてくれたベイルさんに不都合はないか確認すると、汚水を浄化させるために連れてきたスライムが脱走して、ヴァーシユの水飲み場にいるらしい。

連れ戻してもいつの間にかその場所に戻っているとか。

ヴァーシユがスライムに対して反応するか注意深く見ていたが、スライムのことを気にしていないようなので、そのままにしているとのことだ。

さらにベイルさんの話だと、スライムは水飲み場の水を飲み、体が大きく膨らむと左右に揺れながら牧草地を跳ね始める。

スライムが通ったあとの牧草は、うつすらと濡^ぬれているらしい。

水を浄化するスライムから出る液体は、作物の栄養剤になる。

もし牧草の生育が良くなっているのなら、水飲み場の横にスライムの水槽^{すいそう}を作り、そこで採れた液体を牧場に撒^まきたいとのことだった。

「ヴァーシユに牧草の感想を確認してもらえませんか？」

ベイルさんにそう言われたので、相棒の子フェンリル——アトレに通訳をお願いする。

アトレ経由のヴァーシユの返事は、「スライムが牧草に水を撒いたところは、魔素が高まっていて心地よい」というものだった。

ただ、数日で魔素が弱まるため、残念に思っていたそうだ。

スライム一匹で回れる範囲はそう多くない。

広い牧草地だとほんの一角だろう。

そのままヴァーシユにベイルさんの考えを伝えようと、ヴァーシユは喜んだ。

ただ、大量の水を撒くのではなく、牧草がちよつと濡れている程度が良いらしい。

スライムの新たな特性を発見しちゃったかもしれない。

でもこのことは黙っていた方がいいような気がする。

面倒事に巻き込まれるのは嫌だから聞かなかったことにしよう。

話はそれだが、ちよつと濡れている程度か……霧^霧吹きスプレー、いやもっと大きいタイプの噴霧^{ふんむ}器^きが必要かな。

この世界にあるのだろうか？

もしなかったとしても、商品開発を任せているマリアに作ってもらえばいい。

ベイルさんにヴァーシユが喜んでいたことを伝える。

「ベイルさん、水を霧状にして撒く道具があるか知っている？」

「いいえ、聞いたことがないです。自分が知らないだけかもしれませんが」

屋敷に戻って、父上に了解を得なければ、マリアに作ってもらうことができないからね。

私はマリアの工房に向き、知っている前世の噴霧器の絵を描いて説明をする。

説明を聞いたマリアが口を開いた。

「タンクを背負って、歩きながら水を撒く道具ですか。撒く水は霧ぐらい細くなるようにするために、ノズルの先に小さい穴をたくさんあける……」

絵を見ながら、マリアは製作工程を考え始めたので、私の希望をつけ加える。

「ボタンを押せば自動で撒けるものが理想、難しければ手動のポンプ式でよろしく」

ついでに霧吹きスプレーの絵も描き、マリアに渡す。

「こちらは、噴霧器の小型版なのですが、植物に使うのでしょうか？」

あまり水が必要としない室内の観葉植物や、アイロンをする時に利用できるはずだと説明した。

「こちらもぜひ作りましょう。いえ、作ります!!」

やる気のマリアを見て、ちよつとまずいかもしれないという思いが一瞬頭をよぎるが、便利だから大丈夫なはずだ。

「マリア、以前依頼した入浴剤はどうなっているの？」

「入浴剤は難航しています。液体を粉にすることができません」

液体を粉にするかぁー。

天然の入浴剤——湯の花を昔ながらの製法で作っているところを、見たことがある。

たしか薫^もぶき小屋に粘土を敷き詰めて——あとは何をしてたっけな……思い出せないや。

まあ、ヒントくらいにはなるだろうから、マリアに話しておくか。

「なるほど……さつそく屋敷の源泉の横で試してもいいですか？」

マリアは研究熱心だからな。

温度が高く湯けむりが多いところでないといけなかったはず。

「マリア、温泉町の源泉の近くの方が、上手くいく可能性が高いと思う」

「今、建築中の温泉町の源泉ですか？」

「そう、屋敷の温泉よりも温度が高いからね」

今にも温泉町に行きそうな雰囲気だったので、ラジエルに相談してからと説得して、ラジエルのところへ2人で行く。

私たち2人を見た途端、ラジエルは顔をしかめたが、話は聞いてくれた。

「相談に來ただけましでしょう。温泉町の実験は、マリアの護衛と実験を管理できる者を探してからですね」

「護衛と管理できる者？」

私はラジエルに聞き返した。

「そうです。建設中の温泉町に何週間も滞在するのは護衛がいても危険な行為です。小屋が完成し

てからは、時々確認に行く程度が良いでしょう。マリアは、我が商会の主力商品の開発に携わっていますから、狙っている者が多いのです」

建設中の温泉町は男性ばかりだから、絡まれたりすることを懸念しているのかと思ったが……。

マリアを狙った誘拐、勧誘も考えられるのか。

「私、他所へ行くつもりは、まったくくないですよ。温泉は入り放題、ご飯は美味しくて、他所では食べられない料理も出てくる。従業員の部屋は鍵付きの個室で、屋敷の敷地内なら安全安心。それに何といつても次から次へと面白い開発ができる場所は魅力的です」

マリア、ちよつとズれているよ。

引き抜きもあるだろうが、ラジエルは誘拐される可能性が高いと考えているのだろう。

マリアがここを気に入っているのは良かったが……。

「マリア、手配は急ぎますから、しばらく待つてください」

「わかりました。リーンハルト様から別の依頼がありますので、そちらから始めます」

「別の依頼ですか？」

マリアの言葉でラジエルの顔つきが険しくなったので、私は慌てる。

「父上には報告済です。ヴァーシュの牧場で必要な魔導具の依頼です」

「わかりました。これからも必ず報告をしてくださいね」

今日はお小言もなく解放された。

第2話 サウスコートへ

夕食時に、お祖母様が私とジェラ兄様に向かって笑顔を見せる。

「ジェラにハルト。わたくしとサウスコートまで旅行に行きましょう」

その言葉を聞いて、父上が不思議そうに反応した。

「母上、急にどうなされたのです。孫と旅行とは？ 今温泉町の手配で忙しいのではないですか？」

「まあ、アルフは反対なの？」

「違います。何かあるのではないですか、と言っているのです」

父上がお祖母様を追及すると、どうやら、ウエストランド家が砂糖を集めていることをサウスコート家に知られたらしい。

コソコソ集めずに、直接交渉にきなさいとサウスコート前領主夫人から手紙が届いたようだ。

一人で来るのが嫌なら、孫も連れてきたらいいと書いてあったそうだ。

「お祖母様は、サウスコートの前領主夫人とは仲が良いのですか？」

私は疑問に思ったことを口にした。

「そうね、学園では一番気が知れた仲だったわよ。お互い辺境伯家に嫁いだから社交の場でも共同戦線を張ることも多かったしね。今回は砂糖の買付けの件という建前のもと、チェリーやハワイトドラゴンたちを見たいのでしょう」

チェリーは、お祖母様の従魔になった火の精霊だ。

父上が嫌そうな顔をする。

「それがわかっていながら、孫たちを連れていくのですか？」

「そうよ。他領に行くことなんて滅多にできないのだからいい経験になると思うのよ。それにジェラもハルトも海を見たくない？」

お祖母様がそれだけの理由で、熱心に私たちを誘うのか？

「お祖母様、何か隠していませんか？ 私たちを連れていきたい別の理由があるのでは？」

「おほほほ、わたくしの孫は賢いわね。チェリーの住んでいた場所がサウスコートにありそうなのよ。だからあなたたちがついてきてくれたら場所がわかるかと思ってね」

お祖母様に押し切られた父上は、私を見て問題を起こさないようにと念を押す。

大事になるのは私のせいではない。

いつも周りが大事にしているのです。



「ソフィア、久しぶりね。旅行から戻ってきているなら連絡がほしかったわ」

サウスコートの館に着いた私たちを出迎えてくれたのは、お祖母様と同年代の女性だ。

その女性はお祖母様にハグをする。

「キャロライン、ごめんなさいね。慌ただしくして……。先に孫を紹介させてちょうだい。私の隣にいるのが次男のジェラルド、来年学園に入学する予定よ。その隣にいるのが三男のリーンハルト。お言葉に甘えて孫と遊びに来たわ」

「有名なウエストランドの子息たちに会えて光栄だわ。わたくしはキャロライン・サウスコート。」

ここはウエストランドとは全然違った街だと思うから楽しんでちょうだいね」

私とジェラ兄様は本館ではなく、3階建ての離れの、最上階の隣同士の客室に滞在することになった。

この離れにキャロライン様は住んでいるらしく、お祖母様は2階にあるキャロライン様の部屋に近い客室を利用するようだ。

本当に仲が良いのだろう。

部屋に入ると窓から海が見えた。

この屋敷は高台にあるので海が見えるようだ。

部屋の雰囲気はリゾートホテルのVIPルームみたいで、開放感に溢れていて素敵だ。

この世界にリゾートホテルがあるのかは知らないけれど……。

ソファアーに、両肩にかけていたバッグを置く。

すると、それぞれのバッグからアトレとホワイトドラゴンが出て伸びをした。

どちらも私が持つバッグでないとダメだというので、左右の肩にそれぞれかけて移動した。大変だったし、今後もこうだときつい。

「リーンハルトの住んでいるところとは違った景色だな」

『ほんと、気温も高めだし、植物も違うね』

ホワイトドラゴンとアトレが、部屋の中や外の景色を見て感想を口にする。

「アトレは海が初めてだと思うけれど、ホワイトドラゴンはどうなの？」

「我は空を飛んでいる時に見たことがあるだけだ。そなたたちと変わらない」

「じゃあ、みんなで海に行って遊ばないとね」

私たちはたわいもない話をしながら部屋でゆっくり過ごす。

今日は疲れているだろうからゆっくり過ごしたら良いと言われているからね。

夕食はジェラ兄様と2人だ。

お祖母様はキャロライン様と一緒に過ごすらしくいなかった。

私たちは、海と夕日が美しく見える広いテラスを勧められ、そこで夕食を食べている。

「ジェラ兄様、ゆっくり休めた？」

「いや、体を動かしたくて、サウスコートの騎士に混ざって屋敷周辺を走らせてもらった」

「リプカも一緒だったなら、驚かれたのでは？」

「たぶんな。騎士たちは顔には出していなかったけどな。ちゃんと訓練されていたよ」

従魔であるアトレとリプカとホワイトドラゴンも、私たちの隣のテーブルと一緒に食事を楽しんでいる。

「それにしても、海の幸、美味しいね」

私がそう言うと、ジェラ兄様が頷く。

「そうだな、我が家でも食べられるが、ここは海があるから種類が豊富で新鮮だ。色合いも奇麗だし、どれも美味しいな」

「喜んでくれて嬉しいですわ」

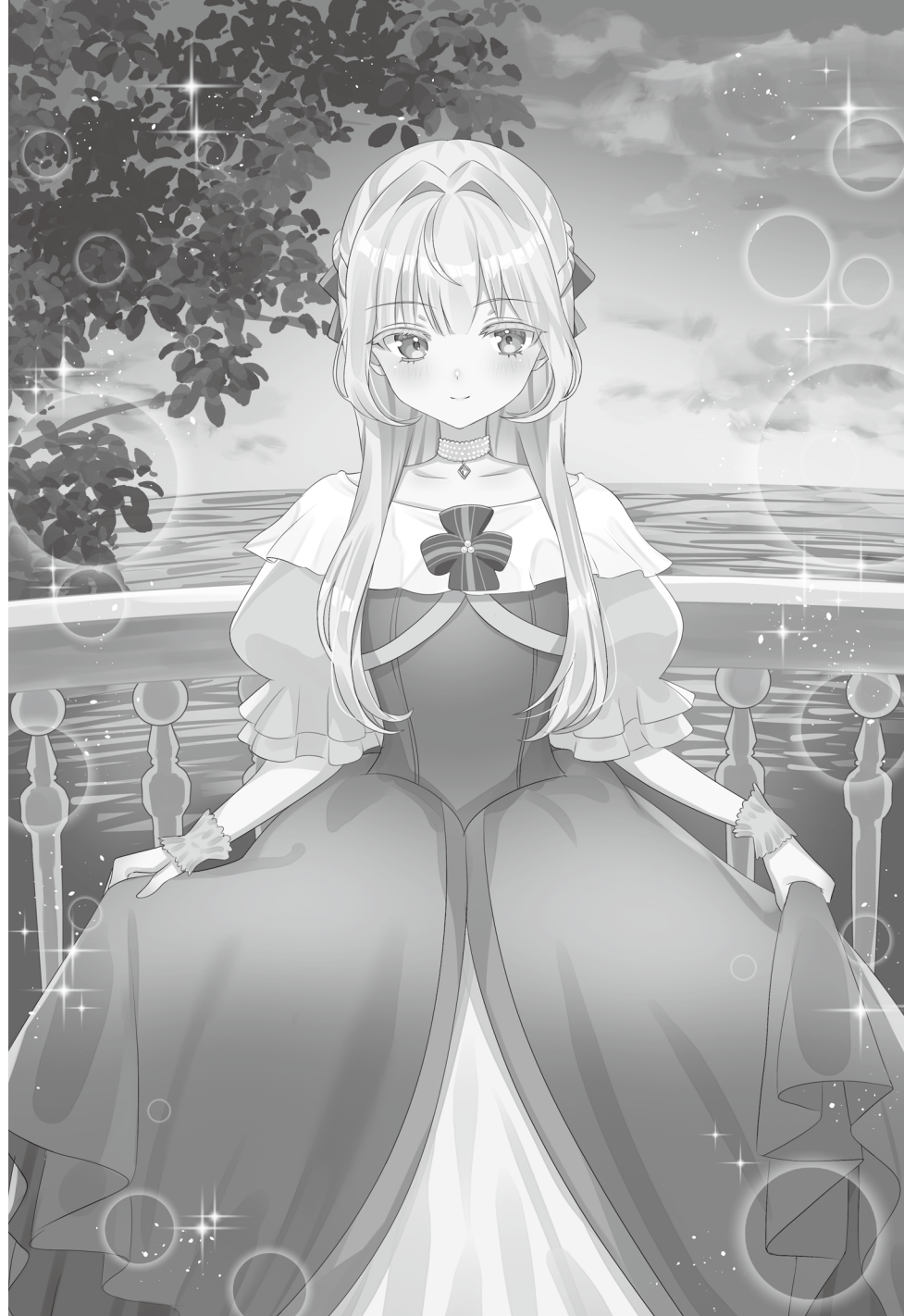
突然、若い女性の声がした。

振り向くと、白金髪にブルーの瞳をした美人がいた。

「お食事中にごめんなさい。わたくしサウスコート家のダイアナ・サウスコートです。当主である父は王都に滞在中で、祖母がお客様をお招きしていることを知ったのも先ほどでした。ご挨拶が遅くなってしまい申し訳ございません」

慌てて私たちも立ち上がり、ジェラ兄様が代表で返事をする。

「わざわざ離れまで来ていただき、ありがとうございます。私はジェラルド・ウエストランド、横にいるのが弟のリーンハルトです。祖母の付き添いでお邪魔しています」



ジェラ兄様が私を紹介してくれたあとに、私は軽く頭を下げた。

「どうぞ、お食事を続けてください。食後にまた改めてお伺いたします」

ダイアナ嬢はそう言いながら、ジェラ兄様をチラチラと見ていた。

同年代っぽいから、今後付き合っていく価値があるかを判断しているのか？

それとも一目ぼれ？

まあ、これからの彼女の出方でわかるだろう。

夕食後、ダイアナ嬢にサロンのようなところへ案内される。

「先ほどはお食事中に申し訳ありません。お客様がいらっしゃっていると聞いて慌ててしまったものですから」

普通は侍女か執事が先に来てお伺いをするからね。

自分の行動を反省しているのか落ち込んでいる感じだ。

「大丈夫ですよ。キャロライン様から良くしていただいていますから、安心してください。ご当主

が不在ならお忙しいでしょうし」

ジェラ兄様が優しい声で安心させるように言う。

「そうなのですけど、そうではなくてですね……」

ダイアナ嬢は急にしどろもどろになって口ごもる。

見た目が整っているから冷たい感じがして、隙がない冷静な人かと思ったけれど、どうやら違ふようだ。

「我々は祖母の付き添いです。十分もてなしていただいていますから……」

「違うのです。ジェラルド様がお見えになったと聞いて慌てたのです」

ダイアナ嬢はジェラ兄様の言葉を遮り、頬を染めている。

「やっと婚約者様に会えたことが嬉しくて……」

「えっ!？」

「何だって!？」

ジェラ兄様と私は同時に驚きの声をあげた。

「ダイアナ嬢、どういうことでしょうか？ 我々は、いえウエストランド家は誰も婚約のことは知らないです。初耳です。そうでしょう、ジェラ兄様」

私はマナーそっちのけで、ダイアナ嬢に問う。

そして固まっていたジェラ兄様も正気に戻った。

「ダイアナ嬢、私は両親から何も聞いていないので……本当の話なのでしょうか？」

ジェラ兄様の返事に、ダイアナ嬢が青ざめる。

「本当にご存じなのですか？ わたくしとの縁談が嫌で……」

「いいえ、本当に初耳なのですよ」

ジェラ兄様はダイアナ嬢を傷つけないように気を遣った。

「ここにも堂々巡りです。お祖母様たちのところへ行行って聞いた方が早いです」

私は2人を急ぎ立て、お祖母様たちがいる部屋へ案内してもらう。

お祖母様たちは、リビングのような温かみのある部屋で楽しそうに話をしていた。

「あら、ダイアナどうしたの。それにジェラルド様やリンハルト様まで」

キャロライン様が慌てた様子の私たちを見て、おかしそうに聞いてくる。

「お祖母様……あの……」

ダイアナ嬢は言いかけて話すのをやめてしまい、じれったく感じた私が口を開く。

「お祖母様、ジェラ兄様とダイアナ嬢は婚約者同士なのですか？ 私もジェラ兄様も初耳なのですが、どういうことでしょうか？」

「えっ、キャロライン、どういうことかしら？」

お祖母様も驚きの声をあげた。

「どういうことって、何を言っているの？ 将来子供か孫同士を結婚させましようと話していたでしょ。子供はお互い男の子だったけれど……孫のダイアナが跡取りだから、ジェラルド様に婿養子に来てもらえるじゃない。それに他の家がジェラルド様に婚約の話を持っていて、すべて断られていると聞いているわ。それって我が家に婿養子に来るからよね？」

「キャロライン、それは学生の時の話であって、ジェラルドとダイアナ嬢を婚約させたいとわたく

しと言ったことはないわよね？」

「そうね。でもソフィアもウエストランドもそのつもりだと思っていたわ。だから、わたくしはダイアナにそう言い聞かせていたの。だけど、なかなか顔合わせの話がないから、いい加減2人を引き合わせたかったのよ」

「キャロライン……」

「ソフィア、あなたは旦那様と仲がいいし、家族仲もとてもいい。羨ましいほどに。わたくしも、息子も配偶者には恵まれなかった。だからダイアナには幸せになつてほしいのよ。ジェラルド様は次男なのに跡取りの長男を僻^{ひが}んではないないし、3兄弟の仲がいいことは有名だわ。兄を立て、弟を可愛がり、努力家で、家族の温かさも知っている。婿として、いえダイアナを幸せにしてくれる人として完璧だと思っているわ」

驚きすぎて、私はただ話を聞いているだけだった。

孫を想う気持ちは凄くわかるけれど、せめてお祖母様に確認してほしかった。

ダイアナ嬢も我が家との温度差を感じたのだろう。

顔が蒼^{そうは}白だ。

自分の婚約者だと思っていた人が、そうではなかったなんて……。

翌日、改めて私、ジェラ兄様、ダイアナ嬢で顔合わせをした。

「昨日は申し訳ありませんでした。祖母のことを含めてお詫^わび申し上げます」

顔が強張^{こわば}ったままのダイアナ嬢が頭を下げる。

「ダイアナ嬢のせいではありません。キャロライン様も祖母に確認したかったと思いますが、祖母も国外に行っていましたし、確認の取りようがなかったのだと思います」

ジェラ兄様がダイアナ嬢の気持ちを和らげようと優しく声をかけた。

ダイアナ嬢が相当落ち込んでいるのは、私でもわかる。

「ダイアナ嬢、私たちにおすすめの場所を案内していただけますか？ サウスコートは初めてですし、あと海にも行ってみたいです。ね、ジェラ兄様！」

「ああ、そうだな」

「それはぜひ、案内させていただきます」

ダイアナ嬢も私たちが気分を害していないことがわかりホッとしたのか、私の提案に乗ってくれた。

翌朝、ダイアナ嬢とジェラ兄様と私、アトレ、リプカ、ホワイトドラゴンで水揚げされたばかりの魚が並ぶ市場から見て回る。

もちろん、護衛のための騎士たちもついてきている。

周囲を見て私は口を開いた。

「赤色や青色といった色鮮やかな魚もいるのですね」

「おっ、兄ちゃんは初めて見るのかい？」

屋台の店主は、日に焼けている男性で、漁師をやっている人だった。

「はい、サウスコートは初めてです」

「それなら、この奥に今日水揚げされた魚を調理して売っている店がある。近くにテーブルもあるから、食べることもできるぞ」

「それは楽しみです」

何も買わないのも悪いと思い、薦められた魚を買い、館に届けてもらうことにした。

ちなみにホワイトドラゴンには、人前で喋らないように言い含めてある。

アトレとリプカは犬と鳥でごまかせても、喋るドラゴン風の生き物はごまかせないからね。

まあ、ジロジロ見られてはいるが、護衛もいるから誰も絡んではこない。

奥に進むと、魚の串焼きやカルパッチョ風なもの、アヒージョにアクアパッツァ、白ワイン煮など、本格的な料理を扱う店が増えた。

ここで食べることもできるし、容器を持参して持ち帰りもできるらしい。

その場で食べる場合、お皿をお店に返せばお皿代が戻ってくる仕組みなようだ。

地元の人も買いにくるなら、美味しいに決まっている。

気になった料理はすべて買って食べてみよう。

料理をかうと、ダイアナ嬢の護衛の人が席を確保してくれた。

私たちが座る席の両隣が、護衛たちの席のようだ。

アトレたちのお皿は持参しているので、料理を少しづつよそって渡す。

リプカはゆっくり味わうように食べているが、アトレとホワイトドラゴンはあつという間に食べ終わり、次を催促する。

「君たち、食べるの早すぎ。私は食べてないからおかわりはもう少し待つてよ」

私が注意していると、ダイアナ嬢が声をかけてくる。

「もし良かったら、わたくしがよそいましょうか？」

「ダイアナ嬢は食べないのですか？」

「わたくしは食べたことがあります。温かいうちに食べた方が美味しいですからね」

お言葉に甘えて、アトレとホワイトドラゴンのお皿に料理をよそってもらった。

最近、アトレとホワイトドラゴンは何につけても競争しているように見えるのだが、気のせいだろうか？

目に入ったすべての料理を食べたが、どれも美味しかった。

ただ料理の半分以上はアトレとホワイトドラゴンで食べてしまったので、私の護衛であるマイヤーたちまで回せなかった、ゴメン。

順番で休暇をあげるから、別の日にここに来て食べてください。

食後の散歩で海辺を歩く。

革靴が汚れるといけないので、私たちは白い砂浜を歩けない。

ビーチサンダルとかがあれば便利なのにな。

そんな事情は従魔たちには関係ないので、アトレは砂浜を駆け回り、リプカとホワイトドラゴン
は海の上を飛んでいる。

急にアトレが風魔法で海水を巻き上げ、リプカとホワイトドラゴンにかけようとすると、2匹は
楽しそうに逃げ回った。

食後の運動かな？

「従魔はみんな幼体だと聞いていましたが、凄い魔法ですね」

遊ぶアトレたちを見たダイアナ嬢が、目を丸くした。

「我が家の屋敷だともっと激しいですよ。他の従魔も加わって、氷、雷、火、風魔法が入り乱れて
いますから」

ジェラ兄様の言葉に、マイヤーたち護衛騎士が頷いた。

うちの子たちが総出で遊ぶ時は騎士団の訓練場を使っているから、マイヤーたちの方がよく知っ
ていると思う。

余談だが、屋敷の庭では、少数で手を抜いた場合のみ遊んで良いと母上に決められている。

一度、みんなでやらかして庭がぐちゃぐちゃになったことがある。

母上のお説教と夕食抜きのお罰を受けたから、それ以来みんな母上の言いつけを守っているのだ。

私は話を変えて、ダイアナ嬢に尋ねる。

「海の方こうに島が見えるのですが、誰かが住んでいたりするのですか？」

「いいえ、あの島は活火山島で誰も住んでいません。ここ数十年は噴火していませんが、かつての
噴火の影響で土地は火成岩や火山灰に埋まっています」

「冒険者が狩るような魔獣はいますか？」

「わざわざ船で行く価値のある魔獣がいるとは聞いたことはありません」

ダイアナ嬢は領主の手伝いをしているだけあって領内のことには詳しく、私の質問にもスムーズ
に答えてくれた。

その後、外国船がたくさん停泊している場所へ船を見に行き、外国の品物を売っているお店を覗
いたりして過ごした。

「ジェラ兄様」

「ハルトも気づいたか？」

「私たちつけられていますよね」

私たち兄弟の会話に、護衛をしているマイヤーが加わる。

「ジェラルド様、捕まえますか？」

「マイヤー、泳がそう。あとでどこに戻っていったか報告してくれ」

「わかりました」

「ダイアナ嬢、今日はこれで帰りましょう。何かあつてはいけなから」

ジェラ兄様がダイアナ嬢に、予定を変更するように提案した。

「わかりました。また日を改めてご案内いたします」

屋敷に戻りマイヤーたちからの報告を待つ間、ジェラ兄様と2人、部屋で会話をする。

「ハルト、海に向かうの島に関して詳しく質問していたが、何かあるのか？」

「チェリーの元いた場所ではないかと思ったんだ」

「なるほどな。だから冒険者の話をしたのか。お祖母様に話せば、あの島を俺たちに見てきてほしいと言そうだ」

「島に行くとなると船の確保とか必要になるね」

私はもう島へ渡る気であるから、楽しみで仕方がない。

「まずはお祖母様に報告してからだ」

ジェラ兄様は、行く気満々の私が先走らないように釘を刺してきた。

そこで、部屋の扉をノックする音がした。

マイヤーが報告に来たようだ。

部屋に入ったマイヤーが報告をする。

「サウススコートの騎士が言うには、情報屋の人間だそうです」

ウエストランドの護衛騎士ハミルトンと、サウススコートの護衛騎士2人であとをつけたら、不審者は情報屋の建物に入っていたそう。

人物の調査依頼を主な仕事にしている、まともな情報屋らしい。

ただハミルトン曰く、護衛騎士が何か知っていそうな感じがしたとのことだ。

「ジェラ兄様の人物調査依頼？」

私はとっさに思いついたことを「^{つぶや}呟いた」。

「サウススコート関係者が犯人か？」

ジェラ兄様はちよつと困った顔をしたが、すぐに表情が元に戻る。

「もしそうなら、心配するほどではなさそうだな」

ジェラ兄様に気分を害さないのかと聞いたら、俺たちも人を雇う時は調査するのだから同じだろうと返ってきた。

婿として適切なのか調べられても構わないと言っているようにも取れますよ。

しかしサウススコートの誰が調べているのだろうか？

その後、私とジェラ兄様はお祖母様のところへ行き、報告をした。

「……そう、活火山島は船で行かないといけないところだね。海は海賊もいるからあなたたちだけで行くのは危険ね。どうしたものかしら」

「冒険者ギルドに船と案内人を付けてくれるか聞くしかないですね」

「ジェラの言う通りね。もしわたくしに何かあった時、帰る場所がわかっていればチェリーも戻れるし、仲間が無事か心配していると思うのよ」

チェリーは今アトレたちとおやつを食べていて、お祖母様のそばにはいない。

「お祖母様、冒険者ギルドの案内人が火の精霊を見たら、口止めしても噂が流れるのではないでしようか？」

精霊の羽は、欠損再生回復薬を作る時に必要だから、高額で取引されるのだ。

「精霊がいると噂になって、チェリーたちの故郷に冒険者たちが訪れるようになることは避けたいわ」

お祖母様は困った顔をした。

「サウスコート海軍の海賊討伐の見学のついでに、活火山島に寄るといのはどうでしょう」

「ジェラ……そんなことを頼むと、サウスコートはますますあなたを婿扱いするわよ」

「俺も早世したくはないので。ただ我が家にはない海軍に興味はありますから、見てみたいです」
ウエストランドの人間は政略結婚をすると早世するらしい。

結局、冒険者ギルドではなく、サウスコートに頼むことで話はまとまった。



「この船のキャプテンを務めているベルナルです。海軍の連中は口は悪いですが、気のいい奴らなので大目に見てやってください」

今は、サウスコート家の海軍の隊員と顔合わせをしているところだ。

ベルナル殿は、がっしりとした体つきに真っ黒に日焼けした肌で、海軍の偉い人というよりは、海賊のトップに見える。

海賊討伐のために商船を装っているの、服装が軍服ではなくラフだから余計にそう思うのかも
しれない。

「ベルナル殿、今日一日世話になる。ジェラルド・ウエストランドと弟のリーンハルトだ。よろしく頼むよ」

「おお、噂の婿殿か。騎士としての腕前もなかなかのものと聞くが、色男だな」

ベルナル殿の口調が完全に崩れている。

こちらが素のようだ。

「ベルナル、ジェラルド様はわたくしの婚約者ではないわ。その呼び方は失礼よ」

「お嬢、そんなにムキになるなよ。好きなのがバレバレだぞ？」

「うるさい!!」

ダイアナ嬢はベルナル殿にウォーターボールを何発も放つが、すべて避けられていた。
今日のダイアナ嬢は、髪をボニーテールにして男装している。

最初の印象と全然違うのだけれど、お転婆さんだったのか。

「ああ、すましたお嬢を見ていたならびつくりだろ。こっちが素だ。なにせ次期当主だ。幼いころから船に乗っている。海軍とは海の人間の集まりだから、荒くれどもをまとめてにやいかん。実は剣と魔法の腕もなかなかだぞ」

ベルナル殿は、ダイアナ嬢を幼いころから知っているのだろう。
どこか自慢げだ。

準備が整ったので、商船を装っている船で最近海賊が出没する海域を回る。

本来は数日海上で過ごすらしいが、今日は私たちがいるので、半日見回ってから活火山島に案内してくれることになっている。

私は隣にいるダイアナ嬢に質問をした。

「ダイアナ嬢、海賊の出没は増えているのですか？」

「ええ。最近我が国で開発された魔導具や文房具の取引が多くて、外国船の出入りが多いのです」

「魔導具と文房具ですか？」

私は嫌な予感がした。

私の表情を見てダイアナ嬢はくすつと笑う。

「そうよ。ウエストランドで開発されたアイロンとドライヤーとガラスペンよ。国に特許申請したから王国内で急速に広まっているわ。我が領から仕入れた国外の商人が、さらに買い求めてくるの。

ティーバッグも人気だし、いずれカレー粉も流行するでしょう」

ダイアナ嬢によると、貿易が活況になるにつれて海賊も増加したそうだ。

海賊を放置していると、サウスコートの貿易に支障をきたすから、取り締まりを強化しているとのこと。

ティーバッグについては、ダイアナ嬢からお礼を言われた。

綿花の使い道が増えたうえ、ティーバッグの袋作りは外で働けない女性の内職として人気だぞうだ。

そういえば、サウスコートは綿花栽培も盛んだったな。

海を眺めながらのんびりと過ごしていると、急に船員たちが慌ただしく動き出した。

「お嬢、海賊らしき船がこちらに向かってきます」

「わかったわ。みんないつものように、相手が近づくまでは商船の振りをして。ジェラルド様と

リンハルト様は艦内へどうぞ」

ダイアナ嬢がテキパキと指示を出した。

「いや、俺も加勢するよ。ハルトは対人戦の経験がないから艦内へ入れ！」

「私も加勢します」

ジェラ兄様が加勢すると言ったので、私も艦内に入ることを拒否する。

「……わかった。無理だと思ったらマイヤーたちと艦内に行くのだぞ。マイヤー頼んだぞ」

この世界には魔法があるからなのか、大砲とかは今のところない。

ダイアナ嬢が「船を水没させたら商品を奪えないので、魔法で甲板にいる人物を狙ってくる」と口にした。

こちら側も海賊船を沈没させたりできない。

奪われた荷が海賊船の中にあることが多いため、船内の品を持ち帰ることが基本らしい。壊さないようにするのなら、熱湯での攻撃が有効？

私はとっさに思いつく。

「リーンハルト様、加勢より防御に徹して大人しく見学をしてください」

斜め後ろで私の警護をしているマイヤーから、事前に釘を刺されてしまった。

「マイヤー、ひどい!!」

加勢しなかったが、参加はダメらしい。

でもこんな機会はないから反論しようとする、マイヤーが先に喋り出す。

「魔獣の討伐ではないので、あまりえぐい攻撃はなさらない方がよろしいかと」

「いや、怪我^{けが}しても回復魔法で治療できるし……」

「サウスコートの隊員に引かれてしまいますよ」

マイヤーから許可が出なかったため、防御壁を作り見学するだけになった。

アトレとホワイトドラゴンも私と一緒に防御壁内にいる。

リプカはジェラ兄様と一緒に参戦だ。リプカ、火魔法だけれど加減できるのかな？

戦闘が始まった。

ウィンドカッターやウォーターボール、アイスボールなどが海賊船から飛んできて、私が張った

防御壁に当たる。

「威力はそこまで強くないみたいだね」

「軍ではないですからね。冒険者崩れの人間も多いと聞きますから、中には強い者もいると思います。油断禁物です」

私が戦闘の感想を呟くと、マイヤーが答えてくれた。

魔法で攻撃しながら海賊船は近づいてきて、船を横につけると海賊が私たちの船に飛び移ってきた。

ここからは剣での戦いが中心になるし、本番だ。

船が横づけされないと海賊を捕まえないし、船を奪えない。

船上で50人前後が激しい戦闘をするから、衝撃を感じる。

ダイアナ嬢と商会の船員に扮^かした海兵隊員は、難なく海賊たちを倒していく。もちろんジェラ兄様もだ。

「しかしダイアナ嬢は強いね。ベルナル殿が自慢するだけある」

「女性の騎士は我が隊にもいますが、ダイアナ様は上位に来ると思いますよ」

私は戦闘状況をマイヤーと語り合う。

「頭^{かしら}、こいつらサウスコートの海軍だ。撤退した方がいい！」

海賊の一人がそう叫ぶと、他の海賊たちも海賊船に戻ろうとする。とうとうバレたようだ。

海賊船の船首に魔法師が立っていて、船を方向転換させようとしているのが見えた。

「アトレ、船首にいる魔法師の邪魔をできる？」

『ハルト、任せて』

アトレは防壁から出て、風魔法で魔法師を吹き飛ばし、甲板に倒れた魔法師にすかさずアイスボールを落とした。

大きなうめき声が聞こえる。

「あれは骨折していますよ。あの痛みが方は相当辛^{つら}そうです」

マイヤーが敵の魔法師のことを解説してくれた。

海賊が次々と海賊船に戻っていくのを見た私は、防壁を解除して海賊船に魔法を放つ。

「氷になーれ」

そう言いながら、海賊船の甲板に魔法水を撒く。

水はみるみるうちに凍っていき、海賊たちは甲板でバランスを崩し、中には海に落ちる者もいた。

私は続けてドーム型の防壁を海賊船の甲板に作って、それを徐々に狭めていき、最終的に海賊

たちを1か所に集めた。

「マイヤー、スリープ草持つてる？」

「ありますが……もしかして海賊を閉じ込めている防壁内に投げ込むのですか？」

「そう、海賊船を港まで持って帰るなら、海賊には眠ってもらった方が楽でしょ」

私はマイヤーの返事を聞かずに行動に移す。

「リプカお願いがあるから来て」

リプカが飛んできて、アトレの背中に止まった。

私はスリープ草に火をつけて、海賊たちがいる防壁の頭上を一部解除する。

「この草を防壁の上から投げ入れてくれる？ 吸ったら眠くなるから気をつけるんだよ」

リプカはスリープ草を口にくわえて飛び立ち、防壁を解除した場所へ落とした。

私はすぐさま防壁を元に戻す。

防壁から煙が漏れないよう、マイヤーに風魔法で調節してもらう。

これで港まで楽に帰れるだろう。

あとは海賊船内に残党がいるかどうかだな。

「ハルト、お前は何をやっているんだ!!」

ジェラ兄様が怒りながらやってきた。

「海賊を防壁内に閉じ込めて、スリープ草でしばらく眠ってもらいだけです。それより、海賊

船内に残党がいるのではないですか？ 甲板は氷が張っていますから溶かしてから行ってくださいね」

「お前の温泉の加護か、魔法で生み出した温水で溶かせ！」

「ジェラ兄様、どこでも温泉を出せるわけではないですよ。でも、温水を生み出すのはできます。それでは温水になーれ」

海賊船の甲板に水魔法を放つと、氷が溶けていく。

これで大丈夫だろう。

私は満足した。

なんか視線を感じたため周囲を見渡すと、みんなが異様なものを見るように私を見ていたので、私は首を傾^{かし}げる。

「皮肉を言ったのだが、本当にやるとは。ベルナル殿、残党討伐を……」

ジェラ兄様は私を見てため息をついた。

「おつ、そうですね。お前からここまで加勢してもらったんだ。サウスコートの実力を客人にお見せしろ」

「[[[[「オー」]]]]」

海兵隊員は海賊船に乗り込み艦内へ向かう。

私は防御壁内にいる海賊たちの監視をしていればいいだろう。

見つかった残党は捕まり、防御壁の中に入れられる。

結局、今日は活火山島には行かずに、このまま港に戻ることになった。

海賊船は海兵隊員が操縦していくそうだ。

「いやあー、婿殿は色男なのに、魔法師としても騎士としても腕が立つ。これでサウスコートは安泰だ！」

ベルナル殿が機嫌良くジェラ兄様の肩を叩いた。

「いや、その話は本決まりではなくて……」

「婿殿は、我らの姫が気に入らないと？ 美人で、幼いころから船に乗り、次期当主として研鑽^{けんさん}しているお嬢のどこが不満なのだ」

「ベルナル、いい加減にして。ジェラルド様が困っていらっしゃるわ。ジェラルド様、申し訳ございません」

ダイアナ嬢が顔を真っ赤にしながら、ベルナル殿に抗議していた。

「いや、ダイアナ嬢のことが好きなので心配しているのでしょう。親心に近いのかな」

ジェラ兄様、ダイアナ嬢が傷つかないようにそう言っているのでしょうか、ダイアナ嬢がますますジェラ兄様のことが好きになっちゃいますよ。

海軍にも気に入られたし、お祖母様の言う通りサウスコートに囲い込まれますよ。

ジェラ兄様のことを考えたらいいお話なのだけれど、ウエストランドからいなくなっちゃうのも

嫌だよなあー。

屋敷に戻ってジェラ兄様と一緒にお祖母様に報告をする。

「海軍の見学のつもりが海賊討伐とは、ハルトは強運？　というべきなのかしらね」

「お祖母様、その言い方はやめてください！　私が原因ではありません！」

「いいや、俺もお祖母様に同意する。ハルトと一緒にいて事件が起こらないことはない!!」
みんなひどい。

確かに巻き込まれることは多い。

でも私自身が起こしているわけではないことを知っているはずなのに……。

私は話を変えようと、船上で疑問に思ったことを口にする。

「そういえば、船上でみんなが変な顔をしていた時があったけど、あれ、何だったの？」

「自覚がないのか。ハルトが滅茶苦茶な魔法を使っていたからみんな啞然としていたのだ」

「変わったことはしていないよ」

「マイヤーたちはハルトの魔法を見慣れているが、サウスコートの海兵は初めて見る魔法ばかりだ」

なるほど、水魔法の応用で、氷や温水を使っていることも知らないからな。

説教になりそうだから、この話はもうやめよう。

「お祖母様、ジェラ兄様とダイアナ嬢の件、キャロライン様は納得されましたか？」

「ウエストランドの人間は政略結婚すると早世する話はしたわ。だから婚約者がいないこともね。

ただ、『サウスコートにいる間、ダイアナと一緒に過ごしてほしい。それでダメなら断ってくれればいい』と言われてしまったわ」

まあ、そうだろうな。

ジェラ兄様みたいな好物件は、なかなかいないものな。

キャロライン様は、このチャンス逃したくないだろう。

あとはジェラ兄様が、どう返事をするかだ。

とはいえ、ウエストランドの呪いって有名な話ではなかったのか。

なんだか知らない人の方が多い？

「ダイアナ嬢は、貴族らしい人かと思ったら全然違うし、色んな顔を見せてくれる素敵な女性です。ただ、これから一生を共にするとなるともう少し考えたいと思います」

ジェラ兄様は真面目に返答していた。

「そうね。まだサウスコートに滞在するのだから、ダイアナ嬢と色々話したらいいと思うわ。私たちはジェラが結婚したいと思う女性でないと認めませんからね」

「お祖母様、ありがとうございます」

お祖母様と話していたら、ダイアナ嬢が捕まえた海賊たちについて報告に来てくれた。

活火山島に海賊の拠点があることがわかったので、明日確認に行くらしい。私たちも参加したいと申し出る。

これ以上、ウエストランドに借りをすることを渋るダイアナ嬢をジェラ兄様が説得する。「次期当主として頑張る姿は素敵だが、危険なら腕の立つ者が一人でも多い方がいい」

あっさりとダイアナ嬢が頷いた。

そしてうつすらだが顔を赤らめている。

うーん、完全に恋する乙女だ、誰かさんに似ているな。

私の兄たちは、無自覚のたらしだったとはなあー。



「いやー、昨日の魔法は凄かったな。リーンハルト様」

ベルナル殿に肩を叩かれて痛いです。

今日もベルナル殿が指揮する商船に、ジェラ兄様と乗り込んでいる。

昨日捕獲した海賊船の中には、魔導具や貴金属、金貨などと一緒に活火山島の地図があり、拠点とは違う場所に印があったので上陸して確認したいそうだ。

その場所に関して、海賊たちは黙秘しているらしい。

また、活火山島の裏側には裂け目があり、裂け目の間を通り過ぎると船が2隻ほど止められる大

きな洞窟があるそうだ。

そこが海賊たちの拠点のようだ。

普通はわざわざ裂け目の奥に行かずに素通りする。

それにこの数十年噴火はしていないとはいえ、作物が育たない場所だ。

誰も近づかないから余計に見つかりづらかったのだろう。

残党がいても対応できるよう、捕獲した海賊船と商船の2隻に分かれて海兵隊員が乗り込んで
いる。

裂け目を進んでいくと洞窟の中は空^{から}だった。

残党が船で戻ってきた時のため、捕獲した海賊船に乗った海兵隊員は待機兼監視役になる。

私たちが乗った商船は洞窟の奥に進み簡易的な^{さんぽし}棧橋を見つけ横づけした。

洞窟内を甲板から確認していたベルナル殿が、ダイアナ嬢に向かって言う。

「奴らは単独でしょう。この洞窟もいじってはいないし、最近ここを見つけたのでしよう」

「そうね。海賊船の船庫には盗品がほとんどなかったから、もう1、2隻襲うための拠点として利用していたのかもしれないわ。上陸して地図にある場所を確認しましょう」

棧橋に降りて歩いていくと壁にぶつかり、そこには梯子^{はし}がかけてあった。

梯子の先を見ると、洞窟の天井が開いていて空が見えていた。

「リプカ、悪いが上が安全が見えてきてくれないか」

ジェラ兄様が肩に乗っているリプカにお願いをしたら、リプカは羽を広げて洞窟の外に出ていった。

しばらくすると戻ってきて、アトレの背中に乗り2匹で会話している。

アトレから話を聞くと、周辺に生き物はいないらしい。

アトレの言葉を周囲の人に伝えたが、念のため斥候役の海兵隊員が先に梯子を登っていき、数名の隊員が続く。

安全が確認されて私たちも梯子を登り、洞窟の外に出ると、そこは溶岩が冷えた火山岩が広がっている場所だった。

「目印になるようなものはないな。地図を見ると北東方向だからこちらです」

ベルナル殿は方位磁石を取り出して、地図と照らし合わせて行く方向を示す。

ゴツゴツとした火成岩を歩いて進むと、小さな噴火口跡と思われる、岩が崩れている場所にたどり着いた。

斥候の隊員が岩を登っていくと何か見つけたみたいだが、すぐに戻ってくる。

「登った先に穴が開いていたのですが、熱風が凄くて近づけませんでした」

ジェラ兄様の肩にとまっていたリプカが、急に岩の方に飛んで行つて見えなくなった。

「リプカ!!」

ジェラ兄様が叫ぶがリプカは戻ってこない。

「ジェラ兄様、リプカは穴の中に入ったのではないですか？」

「熱風の中にか？」

リプカはフィアンマという魔獣で火属性だ。

耐熱スキルがあるのではと、私の考えを話す。

それでも崩れた岩を登ろうとしていたジェラ兄様を、私は必死に止める。

「リプカを信じて待ちましょう」

それからしばらく経った。イライラして待っているジェラ兄様をなだめていたら、リプカが穴から出てきて、ジェラ兄様の肩にとまった。

ジェラ兄様はリプカに腕に乗るように言う。

「リプカ心配したぞ。無茶をするのではない！」

叱りながらも無事な姿にホッとしているのがわかるからか、リプカもジェラ兄様の頬に自分の頭を擦りつけていた。

「アトレ、リプカはなんて言っているの？」

『火山の溶岩が地下にあつて、その影響で熱風が吹き出てるらしい』

私の問いにアトレが教えてくれた。

活火山とは言っていたけれど、また噴火する可能性はあるのか。

ダイアナ嬢たちにリプカが見てきてくれた内容を話す。

「熱風が凄くて近寄れないし、海賊たちが黙秘するようなお宝があるように見えないのですが……」
「お嬢、場所は間違っていない。海賊たちを吊るし上げて詳しく聞かないな」
「そうね。ベルナル、今日の調査はここで打ち切って帰りましょう。暗くなったら帰れなくなるわ」

サウスコートの屋敷に戻り、夕食前にお祖母様とジェラ兄様と私で話をする。

「リプカがチェリーの仲間会って、チェリーの無事を伝えてくれたそうです」

「やっぱり、火の精霊の住処^{すみか}だったのね」

ジェラ兄様が、あのあとリプカから聞いた内容を報告すると、お祖母様も納得していた。

リプカは火の精霊に会ったらしい。そこはかなり深いところで、人間が行くことは不可能だそうだ。

チェリーが人間に捕まった時のことだが、当時チェリーは、岩が崩れたところから空が見えたため、もっと近くで見たいと思って外に出たところを運悪く捕まったらしい。精霊は好奇心旺盛ともいうから、タイミングが悪かったとしか言えない。

待てよ、たしかチェリーは仲間とはぐれたと言っていないかったか？

お祖母様の肩に座っているチェリーに私は問う。

「数人の仲間と一緒に見に行ったのよ。洞窟から出なければ良かったのだけど、外ってどんなところ

るか見たくて私、出ちゃったの」

チェリーはバツが悪そうな顔をしながら、慌てて弁明した。

「ハルト、チェリーを責めないでちょうだい。場所もわかったし仲間が無事で良かったわ。チェリーが仲間のところに戻る時はリプカに乗って行くことになるわね。ジェラとリプカ、その時はお願いね」

「ソフィア、今とても楽しいから一緒にいるわよ。ジェラルドにリンハルト、仲間を見つけてくれてありがとう。リプカもみんなに無事だと伝えてくれてありがとう」

チェリーが私やジェラ兄様のそばまで飛んできて頭を下げ、お祖母様の肩に戻る。

「お祖母様、海賊たちが火の精霊の話をいずれ海軍に話すと思います。ダイアナ嬢かベルナル殿がチェリーと話したいと言いますね」

私が今後の懸念の相談をした。

「その時はチェリーが、場所はわからないと言えはいいことよ。ただ、我々が活火山島に行きたがっていたから見当をつけているでしょう」

執事が呼びに来たので食堂に向かうと、赤みが強いブルネットの男性2人が食堂にいた。

サウスコート関係者だろうけど、誰だろう？

「まあ、ケヴィン殿にブライアン殿、サウスコートの前領主と現領主がお揃い^{そろ}とは。キャロラインの誘いとは言え、ご不在中にお邪魔してしまい申し訳ありませんわ」

お祖母様が男性2人に歩み寄り、挨拶をした。

何とサウスコートの前領主と現領主だったのか。

キャロライン様の旦那であるケヴィン様は、日焼けをされていて体格も良く、海の男という感じだ。一方キャロライン様の息子でありダイアナ嬢の父上であるブライアン様は、体格はケヴィン様似だけれど日焼けはほとんどしていない。

ただ目の色がブルーで、そこはキャロライン様とダイアナ嬢と一緒だ。

王都に滞在中と言っていたから、海賊討伐とかはあまりしないのかもしれない。

しかしサウスコートの人は突然現れる人ばかりだな、血筋か？

「こちらこそ驚かせてしまい申し訳ない。私は海賊の取り締まりで、海から戻ったばかりだ。息子も貿易商品の買付けで王都にすることが多くてな。このような形で挨拶になってしまった」

「ウエストランドで発明された魔導具や文房具、それにティーバッグ事業で、我々も恩恵を受けています。ソフィア様たちが滞在されていると聞き、急いで戻ってきたのです」

2人が事情を語った。

続いて、お祖母様がおふたりに私たちを紹介してくれた。

しかし2人の目線はずっとジェラ兄様に注がれている。

なるほど、2人はジェラ兄様が来ていると知って、急いで戻ってきたわけか。

食堂に入ってきたキャロライン様がケヴィン様たちに気づく。

「あら、2人とも戻ってきていたの？ だけどなぜここにいるのかしら。この離れにはわたくしの許可なく来ないことになっているでしょ」

私たちがいるにもかかわらず取り繕いもしない。

キャロライン様は私たちの方を向く。

「ごめんなさいね。でもジェラルド様に、我が家の内情はきちんとお見せしないとね」

「キャロライン……」

キャロライン様は、お祖母様の言葉を遮る。

「この2人はいつもわたくしに相談なく好き勝手に生きているの。だからわたくしも好き勝手に生きることにしたのよ。もちろんサウスコートの人間としてやるべきことはしているわ。でももう、この2人のために尽くすことはやめたのよ」

キャロライン様は、険しい顔で2人を睨むように見ていた。

「お待たせしてしまっただでしょうか」

ドレスアップしたダイアナ嬢が入ってくるが、険しい顔をしている祖母と、ばつが悪そうな顔をしている祖父と父親を交互に見る。

「お祖父様、お父様、お久しぶりでございます。いつお戻りになられたのですか？」

2人が帰ってきたのに、喜ぶどころか硬い口調だ。

「ああ、ついさっき戻った。ダイアナ、久しぶりだな。海賊討伐をしたと聞いた。サウスコートの

次期当主としての務め、立派だ」

ブライアン様に続き、ケヴィン様もダイアナ嬢に声をかける。

「領内のこともこなせるようになったみたいだな。先ほど確認したがよく出来ていた」

えっと、娘が、孫が、海賊討伐で危険にさらされたのに……無事で良かったとか、親子、家族の会話ってないの？

甘やかすのも良くないけれど、厳しすぎるのも良くないよ。

これはきこえない家族関係だ。

結局、おふたりはキャロライン様に追い出され、食事はいつものメンバーで食べたが、和やかさがなくシーンとした状態になってしまった。

食後、キャロライン様に居間に誘われ、移動する。

「先ほどは醜態をさらしたわね。でもこれがサウスコートの現状なのよ。家族がバラバラなの。わたくしもなんとかしたいと思って努力したけれどダメだった。これ以上ダイアナが傷つかないようにしたいのよ」

キャロライン様は、隣に座っているダイアナ嬢の手を握った。

後継者はダイアナ嬢しかいないからと厳しく接するだけで、家族として接することがないそうだと。何度も改善するように言っても変わらなかったらしい。

ダイアナ嬢の誕生日でさえ不在なことが多いとか。

ダイアナ嬢はキャロライン様が話している間、終始俯いていた。

「ダイアナの母親もね、実家に戻ったきり帰ってこないのよ。ダイアナに手紙も誕生日プレゼントも何も贈ってこないの。こちらから手紙を書いても返事さえないのよ」

ダイアナ嬢が3歳の時に、ダイアナ嬢の母親の実家の領内で天災が起こった。

その際、ダイアナ嬢の母親は、両親、兄夫婦を亡くし、唯一残った兄夫婦の子供の教育と領内の立て直しに注力していて帰ってこないそうだ。

女性であるダイアナ嬢への負担が大きいため、ブライアン様に離婚して後継者を作るべきだと提言したが、必要ないと言ってダイアナ嬢への教育を厳しくしたらしい。

「サウスコートは海賊の取り締まりがあつて常に危険なのよ。でもダイアナは血の滲む努力ですべてこなしていったわ。子供らしい生活をさせてあげたかったのにできなかった。親子で過ごす時間を作らないし、成人してもいない子に領主の仕事を全部任せるのはおかしいのよ」

黙って聞いていたお祖母様が口を開く。

「あなたたち2人、ウエストランドにいらつしやい。温泉に浸かって疲れを癒しましょう。ここと比べたら何もなかったところだけれど、癒しはたくさんあるから楽しいわよ。領主の仕事は前領主と現領主が戻ってきているのだから心配いらないわ」

キャロライン様、かなりため込んでいたのだろうな。

それが、お祖母様が来て一気に爆発している感じだ。